

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 10 月 1 日現在

機関番号：34314  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520448  
 研究課題名（和文） 教室談話における生活語レジスターによる発話の教育的有用性の社会言語学的研究  
 研究課題名（英文） Sociolinguistics Research of Educational Usefulness of "Home Language Register" in Classroom Discourse  
 研究代表者  
 達富 洋二（TATUTOMI YOHJI）  
 佛光大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：40367983

研究成果の概要（和文）：本研究では、教室談話の記録を分析した。その結果、生活語レジスターによる発話には、生活語レジスターによる発話には指標的な機能をもつ発話があるという特徴があることが明らかになった。教師が子どもの発話を聞く時に、生活語レジスターによる発話にはこれらの特徴があることを理解したうえで、子どもの発話に関与していくことで、教室談話が創造的なものになることが分かった。

研究成果の概要（英文）：In this research, we analyzed "Home Language Register" to find a strategy. We found there is utterance that has indexical functions in home language register.

We found that home language register can be more creative if teachers engage in and listen to children's utterances with the understanding of these characteristics.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：社会言語学，教室談話，授業コミュニケーション力，発話スタイル，社会言語学的アプローチ，教師の聞く力，生活語レジスター

#### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は以下の通りである。

- (1) 質の高い授業を創造するためには社会言語学的アプローチによる談話研究が必要である。

- (2) 教育学において教師の聞く力についての研究はほとんどないのが現状である。
- (3) 教師の聞く力を高める研究は学校と研究者の協働で進めることが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、生活語レジスターによる発話を聞き分け、その教育的有用性を取り入れて談話編集することで、質の高い授業を具現化することである。

## 3. 研究の方法

本研究では、文献による基礎研究と小学校における実証的な研究を行う。

- (1) 文献基礎調査：話し言葉研究，社会言語学，談話分析，応用言語学，国語科教育関係の文献精読を中心に行う。
- (2) 実証研究：実際の教室談話の採録（VTR撮影）・談話のトランスクリプションの作成（映像からの文字化）・授業者へのインタビュー（VTR撮影），インタビューのプロトコルの作成（映像からの文字化）・子どもの生活語レジスターによる発話にかかわる意識調査・各データの集約（解析ソフトによる分析）を行う。

### ①トランスクリプションの作成と検討

日常の教室談話の現状をとらえることを目的として、教室談話を文字や記号を用いて可視化データとして再現し、子どもの発話の特徴と教師の聞く行為、談話の参加者への関与の実際を検討する。トランスクリプションは、録音（録画）された談話を詳細に可視化（記号化）したものである。ポーズやプロミネンスなども記号化して示すことにより、記録時にはわからなかった教室談話の事実や授業中に聞き違えていた発話内容などを、詳細に検討することができる。

### ②発話思考法による記録の作成と検討

授業中に教師が聞こうとしていることや、聞きながら考えていることを詳細に記録することを目的として、教師の授業中のつぶやきを教師の胸元に取り付けたボイスレコーダーに録音することや手に持っている教科

書の余白に書き込むことを通して記録する。発話思考法は、思考過程の進行に併せて発話資料を採集できるという利点があるが、授業中に教師がつぶやくことや、頻繁にメモをとることは不自然なことであり、最小限の記録にしているため、断片的なものになることが多い。

### ③内観報告法による記録の作成と検討

教師は授業中の自身の聞く行為についてどのくらい意識しているか（記憶しているか）について、実際の教師の意識を詳細に再現することを目的として、授業後のできるだけ早い時期に作成する。授業時間の全体の記録を残すというのではなく、強く印象に残っているとところや鮮明に記憶しているところを記述した。この記述は、音声や映像の記録によって確認して記述したものではない。トランスクリプションを作成する前の記憶によって記述しているので、発話の詳細な部分や音声的特徴は正確でないことがある。

内観報告法は、思考活動の終了後に活動を振り返り、どのような考えが起こっていたのかの内観を報告する方法であり、想起過程で加工が起こることがあるため、後付けの資料になる可能性もあると考えられる。実際には、授業後、すみやかに授業者の内観を手書きまたはコンピュータで記述した。

### ④インタビューによる記録の作成と検討

インタビュー法は、問いかけと回答によって行う方法である。実際には、授業者の内観報告が終了してから、参与観察者が授業者にインタビューをし、それを録音して記録（プロトコル）を作成するという方法をとった。

## 4. 研究成果

発話のレジスターとは発話の使用域のことであり、発話のスタイルと重ねて考えられることも多いが、一般的に教室談話では、公

的な場でのあらたまったレジスターと公的でない場でのくつろいだレジスターであるとされることが多い。

教室談話におけるレジスターの切り替えは、子どもによる切り替えと教師による切り替えとでその意味は異なる。子どものレジスターの切り替えは、その子どもの意識的な切り替えではなく、いつのまにか切り替わっていたというようなことが多い。しかし、結果的にはその切り替えによって、発話の順番を獲得したり、自身の主張や意図を表現したりすることができている。

このことは、クリッカー（双方向リアルタイムなコミュニケーション機器/Response Card）を用いた調査でも明らかになった。国語科授業の教室談話において、子どもが生活語レジスターによって発話した際、その発話が「自分たちにとって分かりやすいものであったかどうか」「発話者が言おうとしていることが十分伝わってきたかどうか」ということを、発話直後にたずねたところ、共通語レジスターによる発話と比べて、圧倒的に「分かりやすい」「伝わってくる」という回答を得た。

ただし、教師の発話は必ずしもそうではない結果となった。教師の発話は、生活語レジスターによる発話と共通語レジスターによる発話は内容によって、評価が異なった。子どもにとっては、「自分たちの発話を受け止めてくれるとき」や「分かりにくいことを詳しく説明してくれるとき」は生活語レジスターによる発話のほうが分かりやすいが、「学習課題の説明をするとき」や「全員に問いかけるとき」は共通語レジスターによる発話が分かりやすいという結果であった。ここに、私的注釈の際にふさわしい生活語レジスターによる発話と公的説明の際にふさわしい共通語レジスターというレジスターによる特徴の違いは子どもにとっても同様であることが明らかに

なった。

本研究では、小学校における教室談話のトランスクリプションを作成し、複数の研究協力者によって詳細に分析を行った。また、必要に応じて、その授業の指導者の記録（発話思考の記録、内観記述の記録）及び参与観察者の記録、授業を行った教師へのインタビュー記録を併せて検討し、考察を図った結果、教室談話において、生活語レジスターへの切り替えは、次のような指標機能をもっていることが明らかになった。

- ・公式な発話と非公式な発話の切り替えの指標
- ・集団への発話と個人への発話の切り替えの指標
- ・主張とその理由の切り替えの指標

教室談話における生活語レジスターによる発話もつ指標的機能の教育的有用性について社会言語学的な考察の結果は以下の通りである。

(1) 公式な発話と非公式な発話の切り替えの指標を手がかりにした教室談話の編集

公式な発話と非公式な発話の切り替えの指標となっている子どもの発話の例として、「実は ごんぎつねは お経に二時間もかかるとは思っていなかったんじゃないですか?」というレジスターで、直前の発話までの話題を公式な発話で切り替えた例があった。教師は、この指標を聞き分け、話題が変わることを予測した。この発話に続く「あ:そういう考え方もあるか」という発話は、指標となった発話の内容に賛同するものであったが、読解の文脈をとらえたものではなかったため、教師は、指標となった発話を共通の話題としては取り上げなかった。生活語レジスターの指標的機能を聞いたことで授業の文脈を続けることができた例である。

(2) 集団への発話と個人への発話の切り替え

の指標を手がかりにした教室談話の編集  
集団への発話と個人への発話の切り替え  
の指標となっている子どもの発話の例として、  
「死なせたんじゃない」というレジスター  
で発話されたものがある。この発話は、それ  
まで生活語レジスターで発話されていた複  
数の発話がある特定の話し手に向けられ  
た私的注釈であるのに対し、学級全体への  
公的解釈と考えられる。教室談話の参加者  
全体へ向けられたこの発話を聞いた子ども  
は、自らすすんでこの発話を引用して、言  
いさしとなっていた自身の発話をよって完  
了させている。

この子どものように、児童が自らすすんで  
発話できる場合であれば、教師が積極的  
に関与することはないが、そうではない場  
合は、このような指標を聞き取った教師は  
、教室談話の文脈をとらえて、児童に発  
話の機会を与え、談話を関連づけて教  
室談話を編集することが効果的であると考  
えられる。

#### (3) アドレス性の切り替えの指標を手がかり にした教室談話の編集

アドレス性の切り替えの指標となってい  
る子どもの発話の例として、「(略)火縄銃  
で撃たれたりするかも知れないかな」と  
思いますが、それ言い過ぎやろ」とい  
うように、発話中にスタイルの切り替  
えが見られる発話がある。この発話は、  
スタイルの切り替えによってアドレス性  
が切り替えられている。発話の前半部  
分は、ある子ども(A)の発話に対する  
公的解釈を教室談話の参加者全体に向  
かって発話しているものであり、後半  
部分はその発話に対する私的注釈を発  
話した本人(A)に向かって発話してい  
るものである。

この事例では、発話者(A)が自身への  
アドレス性を受け、他の子どもが談話を  
続けているにもかかわらず、それを遮  
って発話しよ

うとしている。しかし、その発話は全  
体には受け入れられず言いさしにな  
り、発話の機会は他の子どもに移  
っている。

この場合、この指標を聞き取った  
教師は、アドレス性が向いている  
発話者(A)に発話の機会を  
与えるべきであったであろう。この  
事例では、「それはさ」と言いかけて  
いることもあり、再度、機会を  
与えることが必要であったと考  
えられる。

#### (4) 主張とその理由の切り替えの指標を手が かりにした教室談話の編集

主張とその理由の切り替えの指標とな  
っている子どもの発話の例として、  
ひとつの発話の中でレジスターが  
切り替えられているものがある。  
前半が冗長的、後半が簡潔に言  
い切っているというように、  
発話中にレジスターの切り替  
えが見られる発話である。その  
切り替えからは、意見の理由  
となることからの説明から  
主張に切り替えられたことが  
分かる。

この指標を聞き取ることで、  
教師は、主張と理由の関  
係が適切であるかということ  
や、それらがこれまでの文脈  
に沿っているかどうかとい  
うことを評価する機会を得  
ることができる。

このように、教室談話の編  
集を行う過程において教師  
は、レジスターの切り替え  
がこれらの指標になってい  
ることを理解して教室談話  
を聞き、それを手がかりに  
することで、切り替わった  
発話以降の談話を創造的  
なものへと展開していく  
ことが可能になると考  
えられる。教師が子ども  
の発話のレジスターの切  
り替えを意識して、談話  
に関与することで、子  
どもは理解を深めること  
や、表現を充実させる  
ことができる。

このことは、これからの  
教師教育の課題として  
考えられる「教師の授  
業コミュニケーション力」  
の習得と習熟に向けて  
の具体的なス

トラテジーとして重要な示唆になると考えられる。

なぜなら、教師は、自身の授業コミュニケーション力（聞くことを通した教室談話編集力）の習得を待って教室談話を行うのではなく、今まさに展開している現実の教室談話の中において、自身の授業コミュニケーション力の習得と習熟を図っていくことが必要である。

そのためにも、ここで明らかにした生活話レジスターへの切り替えに見られる指標的な機能を聞き分けることは、その後の教師の教室談話の参加者への関与に有用であり、大きな意義があると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1. 達富洋二、「小学生の教室談話に見られる「スタイルの切り替え」」,《査読有》人間社会環境研究 第 24 号, 金沢大学人間社会環境研究科, 2012, 93-107
2. 達富洋二、「小学生の教室談話に見られる「省略」」,《査読有》人間社会環境研究 第 23 号, 金沢大学人間社会環境研究科, 2012, pp139-152
3. 達富洋二、「教室談話におけるとりたて助詞の「は」の研究」,《査読無》佛教大学教育学部論集 第 23 号, 佛教大学, 2012, pp19-31
4. 達富洋二、「教師話法研究の現状と課題」,《査読無》佛教大学教育学部論集 第 22 号, 佛教大学, 2011, pp107-116
5. 達富洋二、「教室談話を編集する過程における教師の聞く行為の研究」,《査読有》人間社会環境研究 第 21 号, 金沢大学人間社会環境研究科, 2011, pp1-14

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 達富洋二、「小学校の教室談話の特徴と教師の聞く行為」, 第 122 回 全国大学国語教育学会 筑波大会, 2012 年 5 月 26 日, 筑波大学
2. 達富洋二、「教室談話における児童発話の特徴のカテゴリー化」, 日本教育実践学会 第 14 回研究大会, 2011 年 11 月 5 日, 佛教大学
3. 達富洋二、「教師は児童の発話の何を聞いているか」, 第 119 回 全国大学国語教育学会 鳴門大会, 2010 年 10 月 30 日, 鳴門教育大学

〔図書〕（計 2 件）

1. 森山卓郎, 明治図書, 『教師コミュニケーション力』2012, p115 (pp8-9, 12-13)
2. 達富洋二, 明治図書, 『教師コミュニケーション力』2012, p115 (pp 28-31)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

達富 洋二 (TATUTOMI YOHIJI)  
佛教大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40367983

##### (2) 研究分担者

森山 卓郎 (MORIYAMA TAKURO)  
早稲田大学・文学部・教授  
研究者番号：80182278

##### (3) 連携研究者